連載：読書のすすめ (第 12 回)

今回はこのコーナーには珍しく，小説を紹介します。今回は紹介していませんが，数学ブームらしく，ライトノベルでも「浜村渚の計算ノート」という作品が人気上昇中のようです。

「天地明察」
(角川書店　冲方 丁 著　2009)

冲方 丁 (うぶかた とう) と聞くと，ライトノベル作家と思われがちであるが，この「天地明察」は時代小説である。江戸時代に日本の暦を作った渋川春海の生涯をもとに小説として書かかれたものである。この小説は，2010 年に本屋大賞を受賞し，同年に直木賞の候補にもなった作品であり，2012 年に映画化される予定である。

主人公の渋川春海は，江戸城の囲碁棋士であるが，数学者であり，天文学者でもあるという実在の人物。ある程度史実に沿って書かれている作品であり，作品中での関孝和との関わりあいが面白く，建部賢弘，水戸光圀なども登場する。タイトルの「明察」は，数学の問題を算額や紙に出題した際に，他者によって解答された際，出題者が書く「正解」を意味する言葉。タイトルからは暦や天文に寄った話と思われがちであるが，春海が数学をこよなく愛し，生涯数学を学んでいく様子が描かれている。

渋川春海は，囲碁棋士であることに満足せず，あるとき多数の算額が奉納されている神社に立ち寄る。その神社にふたたび戻ると，ほとんどの問題が一瞬のうちに関という人物によって解かれている。春海は，関に出題すべく問題を考えようとするが…

これ以上はネタバレになるので，書きませんが，470 ページ超の大著でありながら，読み切ってしまえるほど，感動の作品といえるでしょう。ここまで数学を愛して，こんな生き方ができたらなぁ，と思わせる本である。

「数学で読み解くあなたの一日」
(早川書房　ジェーソン・I・ブラウン 著，田淵健太 訳　2010)

この本との出会いは意外なところから始まった。ビートルズの「A Hard Day's Night」という曲の冒頭の「ジャ〜ン」という音の分析をしたある論文を読んでいたのだが，この筆者がこのジェーソン・ブラウンだったのである。しかもその論文を読んでいる最中にこの本が翻訳されているということを聞いたのである。

「A Hard Day's Night」について，少し書くと，このイントロのコードが 2 人のギタリストと 1 人のベーシストでは出せない音であるという謎が昔からあった。これをを周波数解析して，別な楽器が使われていることを解明しているのが，この本の著者であるブラウン教授なのである。

ブラウン教授は，カナダ数学界の元副会長であり，専門はグラフ理論の数学者である。このブラウン教授が，日常を数学で考えている様子を，エッセイのような語り口調で書いている。その冒頭の文章を少し引用してみよう。

> 世の中は二種類の人間に分かれる。数学を理解する人とそうでない人だ。私はたまたま前者に属している。それは祝福でもあり呪いでもある。デートするときには，数学者であることは，意思疎通に障害を抱えているか，世間から独身主義者の烙印を押されているようなものだ。…

この本は，そんな数学が，さまざまなところに役立つことを日常の中で話している。平易な説明で分かりやすく書かれているので，授業の合間に生徒に話すネタ本にもなりそうである。

【編集委員会】